「若紫の藤袴」――紫袴の色合いについて――

跡見学園女子大学 文学部 人文学科 教授
岩田　秀行

跡見のスクールカラー紫色の由来が、皇后陛下のお言葉により紫袴を着したことに拠るものであることは、以下の文献に記されているとおりである。

> 明治初年の東京は、誠に驚く許りでした。……其頃竹橋女學校では、生徒が竪縞の馬乘袴を穿いたものでした。左様致しますと、恐れ多くも皇后様には、この有様を御覽あらせられ、殺伐の體裁であるから、之は昔から宮中には女の付る緋の袴を用ひよと、然し學校では紫色にすれば緋と同じ位なればと仰せられて、花蹊仰を畏みて明治八年より今に紫袴を用ひて居ります。……
> 仍で私は皇后様の御趣意通り、優美な處をと存じ、わが生徒の服装をば、髪は稚子髷に振袖、而して袴と云ふ風に致しました。但し緋の袴と申すは一般に取つて出來難う御座いますので此のめりんすの紫袴を用ふる事にしました。　―「服装は優美で品位を保てば足る」（明治四十四年二月）
>
> 跡見花蹊述『をりをりくさ』(大正四年、實業之日本社)

> 因にこゝに特筆すべきは、我跡見女學校にて生徒の用ふる紫袴は、明治八年中、皇后陛下の御内意によりて始めて制服となせるものにて、そはその頃、陛下が女子師範學校へ行啓ありしに、生徒等が紺と淺黄の棒縞の襠高の馬乘袴を穿けるをみそなはして、女子にふさはしからずと心付かせたまひ、跡見女學校にては紫袴を用ひよ紫と緋とは同位にて、女生徒にはふさはしき色合なればと、時の宮内卿を經ての、御沙汰によりて、辱くも令旨を奉戴せしなり。されば跡見女學校の袴は紐一筋の緋 袴 仕立にて、他の普通の袴とは製法を異にせり。この一事は跡見女學校生徒たるものゝ永く誇として記念すべき所のものなり、一言こゝに附記しつ。　―「御前揮毫」
>
> 藤井瑞枝編『跡見花蹊先生實傳 花の下みち』（大正八年、實業之日本社）

ところで、実際にその紫色はどのような色合いであったのか。当時の写真を参考にして考えてみたい。**写真1**は、明治8年11月開学の際に行われた式典の写真である。袴の色はかなり濃い色となっている。**写真2**は、開学当初のものと言われている有名な校舎正面の写真であるが正面に写っている生徒の部分を拡大した。この袴の色は、白かと思われるほどの明るい色合いとなっている。**写真3**は、萬里小路伴子の開学程なき頃と思われる写真である。これは袴の色はかなり濃いものである。**写真4**は、明治15年頃とされている塾生の普段着である。これも袴の色はかなり明るいものである。**写真5**は、明治29年寄宿舎前で撮られた卒業式の際の写真である。色のばらつきはあるがかなり明るい色の袴を穿いている。**写真6**は、明治31年の寄宿舎の塾生の写真である。非常に明度の高い色の袴を穿いている。**写真7**は、明治35年の卒業式の写真である。これも中央の花蹊先生まで含めてほぼ全員の色合いは明るい感じで揃っている。**写真8**、**9**は、それぞれ、大正8年、9年の卒業式の際の写真である。向かって左端に座っている者だけが濃い色の袴となっている。他の生徒は多少色合いにばらつきがあるが、明るい色の袴であることがわかる。ただ、**写真9**の方がやや深い色合いである。

つまり、開学当初の**写真1**と**写真3**、および**写真8**、**9**の左端の者を除き、袴の紫色は、通常考える紫色ではなく、これが本当に紫なのであろうかと錯覚を起こすほどのかなり明度の高い色であるが分かる。しかし、この袴の色を紫ではないと考えることは困難であろう。跡見の袴が「紫」であるのは当然の前提であり、しかも卒業式に紫袴でないとは考えられないからである。

それでは、この明るい紫色は具体的にはどのような色であったのか。これを考える際に参考となるのが、大正8年5月25日に執り行われた花蹊八十歳の祝賀会に出席した、井上角五郎の「若紫の藤袴」(『汲泉』57号、大正8年12月）と題した以下の祝賀文である。（句読点、振り仮名は私に付した）

> 拜啓、小生は花蹊先生が夙に意を女子の風儀に用ゐられ、女學生徒の袴を創めて、今日一般に行はるゝに至る此一事以て、尋常女學者流ならざる事を知り、積年欣慕して措く能はざるものに候。然るに先生の高壽賀會に蒞むや、音樂と共に、
>
> 　わかむらさきの　ふぢばかま　まなびの庭に　さきかけて
>
> の唱歌あり。小生は之を聞きて覺えず手巾を以て目を拭ひたり。強ち喜びたるにあらず、固より悲しむべき故なし。是ぞ所謂感極まると云ふべきか。音樂高尚ならずとも唱歌巧妙ならずとも、其事其時を得て其人に

逢はゞ鬼も泣くものなりと。また覺えず一笑したる次第。御申越（まうしこし）に任せ右申上（あげ）候。頓首。

この唱歌とは、八十の賀を記念して作られたと思われる「千代の聲」（加藤義清作歌、天谷秀作曲）のことである。歌詞は同じく『汲泉』57号に収められている。

わかむらさきの　藤袴　まなびの庭に　さきかけて
みだれぬさまを　しめしつる　君がいさをは　いと高し

ここに「わかむらさきの藤袴」と表現されているのは、当然跡見女生徒の紫袴のことである。「藤袴」は秋の七草の一として知られているが、明るい藤色の花を咲かせ、その形状が袴に似ているところから「藤袴」の名称がある。その藤袴の色を形容して「若紫の」と冠したものである。

これは既に和歌にも用例が見られる。

がまふのの**わかむらさきのふぢばかま** 千世の秋までにほへとぞ思ふ
（夫木和歌抄・4501）（江帥集・356）（歌枕名寄・6227）
（大嘗会悠紀主基和歌・543）（匡房集Ⅰ・356）

かすがのの**わかむらさきのふぢばかま** 草のゆかりも露ぞくだくる
（夫木和歌抄・4514）（為家五社百首・291）

ぬししらぬ**わかむらさきのふぢばかま** たがゆかりとて風のたつらん　（千五百番歌合・1228）

つくまのの**わかむらさきのふぢばかま** 立ちてみゐてみあかぬ色かな　（漫吟集・1337）

＊複数の出典のあるものは、もっとも流布していると思われる「夫木和歌抄」のかたちを掲出した。

また明治期には長唄、端唄にも、次の用例が見られる。

雲井に舞える田鶴の羽も**若紫の藤袴**あけほのぼのとあかねさす
（長唄「慕紫四季彩」明治20年頃）

招く芒の穂に出でし**若紫の藤袴**桔梗苅萱こきまぜて
（端唄「七種」―『俗曲文庫端唄及都々逸集』大正6年）

「藤袴」の色の形容を「若紫」と称したのは、言うまでもなく、『源氏物語』に因んだもので、光源氏が北山で出逢った少女「若紫」が、源氏の慕う「藤壷」女御（後、中宮）と縁者であったという設定によっている。つまり、「紫（藤壷）」の所縁（ゆかり）の少女を「若紫」と呼んだことに基づいたものである。

井上角五郎の言う「若紫の藤袴」とは、跡見の女生徒の袴姿を植物の「藤袴」に喩えて雅やかに表現したものであるが、それは架空の文飾ではなく、実際に「藤袴」の明るい藤色である「若紫」色の袴を穿いていた故の表現と考えられよう。つまり実際に「若紫」という色名が存在し、その「若紫色の袴」の意味に違いない。写真によって確認出来る明るい紫色こそが、おそらく「若紫」色だと考えられるのである。それは、「源氏物語」に因み、皇后陛下の御内意による「紫色」（源氏物語の藤壷）に縁のある「若紫色」（少女若紫）を採用したとみられるからである。

通常の紫色ではなく、明るい紫色（若紫）になっていることについては、もうひとつ「禁色」と「許しの色」という考え方を考慮する必要がある。紫色は禁色である。その禁色を皇后陛下から許されたのであるが、紫色をそのままに着用に及ぶのではなく、色を淡い色にして着用するのである。これを「許しの色」と言った。

花蹊に次の和歌がある。

忘るなよわが學びやの藤袴その紫のたふとかる色
（跡見李子編『花の雫』昭和3年、花蹊三回忌の記念出版）

「若紫色の藤袴」が、禁色の紫色を特に皇后陛下の許しにより着用できたその尊さを忘れるなとの謂である。その背後には当然、藤壷と若紫との関係も重ね合わされているのである。

従って、**写真2**により、開学当初からすでに許しの紫色（若紫）を着用していたと推定されるのである。それでは、開学時の祭典の**写真1**では、なぜ濃い色合いになっているのか。これは、『花の下みち』に、「紋服緋（ひの）袴（はかま）の正装をなして」とあるように、実は紫色ではなく、緋の袴なのである。当然黒く写るわけである。また、**写真3**の袴の色が濃いのは、萬里小路伴子は公家の令嬢であり、許しの色を用いる必要がなく、通常の紫でもよいためと考えられる。萬里小路李子の写真も濃い色の袴となっている。また、**写真8**、**9**の左端の者の袴が濃いのは、おそらく塾長などの監督代表的地位にあるものだからと考えられる。

さてそれでは、実際にその「若紫」色とはどのような色なのか。**色1**は、大日本インキ化学「日本の伝統色」の「若紫」、**色2**は、「有職組紐道明」の「若紫」である。**色3**と**色4**は、伝統色を再現しているサイトにおける「若紫」色をRGBの指定により色作成し、そのCMYKを示したものである。これらの4種類の「若紫」は、淡い

写真1（明治8年11月）

写真2（開学当初）

写真3（萬里小路伴子）

写真4（明治15年頃）

写真5（明治29年卒業式）

写真6（明治31年校長宅庭園において）

写真7（明治35年卒業式）
※口絵にカラー掲出

写真8（大正8年卒業式）

写真9（大正9年卒業式）

色1　大日本インキ化学「日本の伝統色」
第6版、1994年

色2
「有職組紐 道明 」
(https://kdomyo.buyshop.jp/)

C：25
M：55
Y：1
K：0

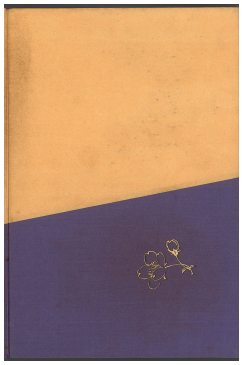
色3　「日本人の美の心！　日本の色」
(https://irocore.com)

C：26
M：73
Y：2
K：0

色4　「原色大辞典」
(https://www.colordic.org/colorsample/2408.html)

色5

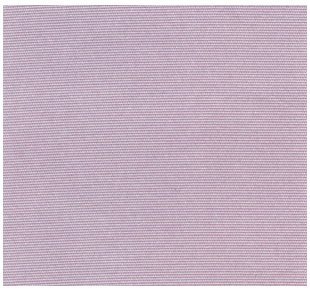
色6



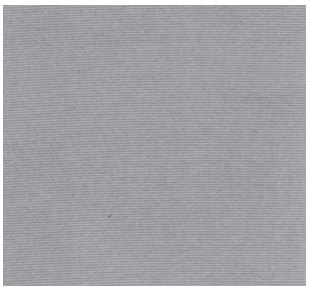
色11

色7

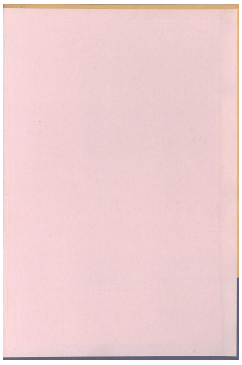
色8



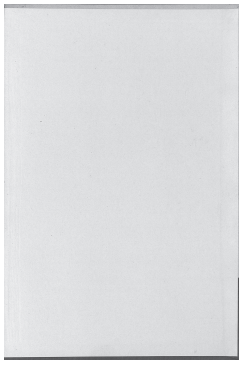
色9



色10



色12



色13

紫色であることは確かであるが、かなり青みがかったり、また赤みがかったたりで、それぞれに色合いが異なり、決定的な色合いを確認出来ない。いま仮に、これらの色をモノクロ化してみると、**色5～色8**のような色合いとなる。しかし、このどれもが跡見の写真の袴の色合いよりも濃く、一番淡い**色7**（つまり**色3**）がかろうじて一番近いように思われる。どうも、跡見の「若紫」は、**色3**か、あるいは、さらに淡い紫のように感じられるのである。

吉岡幸雄『日本の色辞典』（2017年、紫紅社）には、「若紫色」はないが、「藤袴色」が収められている。**色9**（モノクロ版が**色10**）がそれである。これならば、かなり写真に近い感じとなる。しかし、**写真2**、**写真5**、**写真6**などを見るとさらにそれよりも明度の高い色も存在する。**色11**は『花の雫』の裏表紙、**色12**は『花の雫』の見返しである。『花の雫』は、花蹊の一周忌を記念する出版である。この表紙と見返しに使われている色は意味を持たせて使われていると考えられよう。

いままでの考察からすれば、この見返しに使われている、ほとんど白色にも近い淡い紫こそ、写真の中の明度の高い袴の色にもっとも近いといえるのではないだろうか。つまり、『花の雫』は表紙に叙勲を受けた花蹊先生の使用された紫、見返しに生徒たちが着用した許しの色の紫を配したのではないかと考えられる。ただ、現在残されている多くの『花の雫』は経年のための退色を考慮せねばならぬように感じるが、**色11**、**色12**は、ほとんど開けられることもなく残されていた、波多野華涯所持（小田切マリ氏蔵）のものである。表紙の紫も普通の本より相当濃く残っている。その見返しであるから、元来ほとんどこの色に近かったものと考えて好いように思われる。現在、多くの色辞典類で確認出来る「若紫」は、赤みがかった淡い紫であるが、跡見の「若紫」は、禁色の「深紫（こきむらさき）」に対し、許しの色の「浅紫」という考え方なのであろうと思われる。実際は、写真でも、色の濃さはある程度の幅を持っているため、この色というように決定は出来ないが、通常の想定を超えたかなり明るい紫であることは確かである。

以上、跡見の女学生の袴の色が紫であることは疑えないにもかかわらず、現実の写真の明るい色合いについては今まで疑問にも思われずに見過ごされてきた。この色合いこそ「若紫」とよばれるもので、「こきむらさき」に対する許しの色の紫であったと考えることによって、すべての謎が解けるのではなかろうか。

【追記】

現在卒業式の袴が全国的に流行となっているが、その根源が明治８年、跡見に起ることは、上記諸文献から明らかであるにもかかわらず、ネット上では石井研堂の『明治事物起原』の海老茶袴の起源を引いて、女学生の袴は、華族女学校における下田歌子の考案によるものとし、「下田歌子が先か跡見花蹊が先か、難しいところ」などと記してあるが、華族女学校は明治１８年からであり、まったく説として成り立たぬものである。

また、現在の卒業式では、派手な柄物の服を平然と着用しているが、上記卒業式の写真に明瞭に示されているように、黒紋付きが式にふさわしい服装である。跡見では、式服を下記の如く定めていた。

> 生徒一同へ当学校之服制を申渡す。正服は木綿、黒の五ッ紋白重附、是もキャラコ地、半襟も白、同地紫めりんす袴也。（『花蹊日記』明治32年２月21日）

つまり黒の五所紋付き、生地は絹でなく木綿であることが明記されている。これは、貴顕高位の子女が多いため、派手になることを諫めて質素を旨としたものであろう。「白重附」とは、白の比翼襟を附けた紋付きで写真にもそのように写っている。「是もキャラコ地」とは比翼襟もキャラコ地ということであるから、紋付きもキャラコ地ということになる。つまりキャラコ木綿の黒紋付きである。キャラコ木綿は現在足袋にしか使わないが、昔はキャラコの黒紋付きがあった。「半襟」は下着の襟である。

また、袴に関し、上記『花の下みち』に、「跡見女學校の袴は紐一筋の緋袴仕立にて、普通の袴とは製法を異にせり」とあるように、宮中女官の緋の袴と同じ仕立てにするとのことである。

なお、現行の女性の和装では衣紋を抜く着方がかなり一般的になっており、そのため、仕立ての段階から「繰越（くりこし）」を、五分から甚だしくは一寸まで取るようになっている。しかし、「抜き衣紋」は、元来日本髪の髷の油がつかぬようにするとともに、色気をかもし出す花柳界の着方である。学舎の卒業式においては、襟を抜かないで着る着方（永井荷風は、これを「詰め襟」と書いている）こそふさわしいものである。黒紋付きで抜き衣紋にしない着方は、宝塚音学学校の卒業式ではきちんと守られている。和装が一般家庭の日常着でなくなってしまったため、和装にもドレスコードがあることを、多くの人々が忘れてしまったのである。

＊資料はすべて花蹊記念資料館のご配慮を得た。また、『花の雫』およびその色配置に関しては小田切マリ氏よりご教示、ご高配を得た。